

## 死の意識とディキンソンの”Death Poems”

原口, 遼

<https://doi.org/10.15017/2332595>

---

出版情報 : 文學研究. 87, pp.23-60, 1990-03-31. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 死の意識とディキンソンの“Death Poems”

原 口 遼

〔主題と意識〕 Emily Dickinson (1830～1886) の詩は、(中には長詩も、或いはスタンザに分かたれない詩も若干あるにはあるけれども)<sup>(1)</sup>その基本形は4行もしくは8行(2連)からなる短詩形といてよく、内容は簡潔、イメージは硬質、論理の展開は知的で、着想鋭く、意表を衝き、読むとなかなかスリリングであります。しかし、あるまとまった分量のディキンソン詩(以下D詩と略す)を読んで参りますと、やはりこうした短詩群を全体的に繋げているもの、D詩全体を貫いて流れているものへの興味が当然の如く湧いて参ります。あるいは、詩人その人の世界観を掴みたいとする欲求が生まれて来るものです。そのために、これまでもいろいろな批評家が様々なアプローチを試みて来ているわけですが、私は今回、ディキンソンはなぜこうした独特の詩を書いたのだろうかという関心より、二つの側面からアプローチすることで、私なりのディキンソン像を造る試みをしてみたいと思います。

一つの側面とは、D詩の主題(theme)もしくは題材(subject)という面における特質を分類・整理する事からのアプローチでありまして、もう一つの側面とは、それではディキンソンはなぜこうした種類の詩を物したかといった、いわば詩人の発想の側からのアプローチであります。無論、このようなアプローチにはいくつかの陥穽があります。一つには、主題・題材の分類を実行しますと、その分類に入って来ない詩や、カテゴリー分けの境界線上の詩群が閑却されがちになるという事、また言語的なレベル(signifiant レベル)での問題——style, rhetoric, imagery あるいは韻律等——が閑却されがちになる等の事が起こってまいります。一方、なぜ詩人はそうした詩を書いたのかと、詩人の意

「実験主義」「経験主義」と呼べるでしょうが、自分の眼で確認する事をもって旨とし、納得できないものはなかなか信じないという傾向性の強い、エミリ生来の態度をますます堅固なものにしたように思われます。

例詩①。(I've seen a Dying Eye / 547。例詩は詩の第1行目とジョンソン版の詩番号によって示す。以下同様。)

私は死に行く人の眼を見たが、  
眼は部屋の周囲をぐるぐると見回していた。  
あたかも何かを捜しているみたいに。  
眼はさらに曇って行き、  
それから、霧が懸かったようにどんよりとして来て、  
それから、捜していたものを明らかにしないまま、  
眼はハンダづけされてしまった。  
もしその何かが見つかったのならいいが.....

例詩②。(The last Night that She lived / 1100)

彼女が生きていた最後の夜、  
それは何の変哲もない普通の夜だった。  
ただ瀕死の者がそこにいて、  
そのことが事の次第を違ったものにしていて。

私達はこれまでは見過ごされて来た  
とても些細なことにもよく気がついた。  
いわば、強調文字にされた心の上を、  
照らしだす巨光によって。

(中略)

彼女がまさに逝こうとする時、私達は待っていた。  
大変窮屈な時間だった。  
ついに、徴が現われかかったとき、  
私達の魂は千々に乱れて、押し黙った。

彼女は何かを口にしようとしたが、言葉は途切れた。  
それから葦の如く軽く  
水の方へと身を曲げ僅かに身を震わせると、

うなずいて、死んで行った。

そして、私達は……私達は彼女の髪を整えてやり  
頭を起こして真っすぐに立ててやった。

（以下、略）

(2) 葬家の異様な雰囲気、慌ただしさを描いた時。葬式の式次第を記した詩。ディキンソンは死に行く人そのものも克明に観察・描写しましたが、葬家のたたずまい、葬式の式次第、死という事件が小さな町（Community）に与える impact についても逐一、入念に記しています。

例詩③。（There's been a Death, in the Opposite House, / 389）

向かいの家で誰かが死んだ。  
つい、今しがた。  
わたしにはそれが分かる。そうした家が  
必ず待っている痺れたような無表情で。

隣人達は衣擦れの音をさせながら、出入りする。  
医者が馬車で立ち去る。  
窓が豆の鞆がはじけるようにして  
突然ぱたんと開く。

誰かが敷布団を外にはおり投げる。  
子供達が急いで逃げる。  
皆んなあの人をきっとその上で死んだのだと思う。  
私が少年の日に丁度そう思った様に。

牧師さんがいかめしそうに中へと入って行く。  
あたかもわが家へと入って行くかのようにして。  
牧師さんは今やすべての哀しむ者たちをわが物にする、  
子供達までも。

それから飾り着け屋と  
あの恐ろしい商売の人がやって来て、  
家の寸法を計る。

まもなく葬列が出て行くだろう。(1行のみのライン)

飾り房や馬車の行列。  
片田舎の事として  
知らせは直感的に見て取れる、  
看板みたいに簡単に。

例詩④。(I Felt a Funeral, in my Brain, / 280)

私は葬式を感じた、頭の中に。  
会葬者があちこちに  
いつまでも歩いているのを感じた。  
感覚が破けてしまいそうだった。

全員が着席したとき  
弔いの調べが太鼓のように  
ゴーンゴーンとなり続け、  
私は心が麻痺してしまうように感じた。

皆んなが柩を持ち上げるのが聞こえ  
例の鉛の長靴で  
私の魂の中を軋みながら横ぎるのが聞こえた。  
空間が、ゴーンゴーンと鳴りだし、

空全体が釣鐘になってしまい、  
存在そのものが巨大な耳になったかのようで、  
私と沈黙とは奇妙な余計者のようになり果て、  
ふたりぼっちで難破した。

(以下、略)

(3) 墓参りする人達の振舞や姿を描く。墓地で、今はその銘もかすれてしまった昔の人の墓碑銘を読もうとして、時の経過について瞑想に浸る人達の事を描く。

例詩⑤。(We do not play on Graves— / 467)

私達は墓場で遊ばない。

そこは遊び場になる場所もなく、  
平地でなく、スロープになっているし、  
その上、人達がやって来る。

やって来た人達は  
お花をお墓に供えて顔を俯ける。  
そんな人達の心臓が落っこって来て、  
折角の遊びを駄目にしてしまわないかと恐れる。

だから私達は敵がやって来たかのように、  
遠巻きにする。  
そして、時々ぐるりを回ってみては、  
どれだけ遠く離れているかと、覗いて見るのだ。

例詩⑥。(After a hundred years / 1147)

百年後には  
誰もこの場所を知らない  
ここで演じられた苦悩も  
何事もなかったように動かない

雑草は勝ち誇って生い茂り  
見知らぬ人達が通りかかると  
昔に亡くなった人達の  
寂しげな墓碑銘を一字一字と判読しようとした

夏野を吹く風は  
この道を思い出し……..  
記憶が落としていった鍵を  
本能が拾い上げる……..

(4) 自己の死を仮想してみて、後事を託すことを記した詩群。

例詩⑦。(If I shouldn't be alive / 182)

駒鳥達がやって来た時  
もし私がこの世にいなかったなら  
赤いネクタイをしたあの駒鳥に

記念のバン屑を上げて下さい。

もし私がすっかり眠り込んでいても  
有難うと言えなくても  
私が言おうとしている事は  
分かってくれますね、大理石の唇で。

(5) 自分の死後も、この世では日常生活が変わりなく継続されて行くだろうという事を、想像しつつ描いた詩。

例詩⑧。(If I should die, / And you should live— / 54)

もし私が死んで、  
あなた達が生きていたとしたら、  
これまで通り  
時は滔々として流れ行き、  
朝は輝き、  
昼は燃え立つとしたら、  
鳥たちは朝早くから巣造りに取り掛かり、  
蜜蜂達は元気よく野原に出掛けるとしたら、  
人はきっとこの世の営みから  
気が向いたときに出発出来る事でしょう！  
私達があの世で雛菊と横たわるようなとき、  
相も変わらず家畜市が立つ事が分かれば安心。  
商売も続いて行く事でしょう、  
取引も活発に行なわれる事でしょう。  
紳士方が相変わらず元気よく活動している  
楽しい情景は  
此岸との別離を平静なものにし、  
魂を晴朗なものに保たせてくれます。

ここまでは死の想念としては通常のものといえるでしょうが、これから先が常人離れて来て、ディキンソン独特の世界を展開して行きます。

(6) 他ならぬ自分が死ぬ瞬間の事を、死んだ後で回顧的に語る、といった形式の有名な詩があります。その時、死者(=私)が「永遠の魂」を得られたのかどうかは(恐らく詩人の側で入念に)不透明なままにして残されているようなの

で、その事がディキンソンの死観を考える上から、この詩を「問題詩」にしているようです。しかし、その点は後ほど考えてみる事にしましょう。

例詩⑨。(I heard a Fly buzz-when I died- / 465)

私が死んだ時、私は蠅のブーンという羽音を聞いた。  
部屋の中の静けさは  
嵐の前の  
静けさのようだった。

周囲の者の眼は涙も濡れ果てて、  
息を固く凝らして  
死の大王が目撃されるときの  
最後の攻撃を待ち設けた。

私は形見を遺贈しようとし  
上げられるものには  
サインし終えた。と、  
そこに蠅が入って来たのだ。

陰鬱で不確かで吃るような唸り声を上げて  
光と私との間に入り込み、  
そうすると窓が見えなくなり……  
私は見ようとしても見るができなかった。

(7) 死後の墓の中での、いわば地下生活を描く詩群。ディキンソンにとっては、お墓の中には一定のスペースがあるようで、いわば納骨堂風の雰囲気がありますが、当時は土葬のようですから、死後のスペースというのは比喩的な意味のものでしょうか。

例詩⑩。(The grave my little cottage is, / 1743)

お墓が私の小さな別荘、  
そこで、私はあなたのために「家事」をいたします。  
私は客間を整え、  
大理石のお茶を持って参ります。

二人は暫らく打ち解けません。



おそらくは、四季の一廻りの間。  
しかし、ついに永久に持続する生活が、  
二人を強い絆で結んでしまいます。

例詩⑩。(I died for Beauty—but was scarce / 449)

私は美のために死んだけれど、  
真理のために死んだ者が  
次の間に横たえられた時、  
少しもお墓に馴染んでいませんでした。

その人は「あなたはなぜ失敗したのですか」と静かに尋ねた。  
「美のために」と私。  
「私は真理のために。両方とも同一のものだから、  
私達は同じ運命ですね」とその人は言った。

それで、ある夜出会うと、親類のように、  
私達は部屋越しに語った。  
いつしか苔が私達の唇に達して  
私達の名前を蔽い尽くしてしまうまで。

⑪。(What Inn is this / 115)

奇妙な旅人が  
夜になって宿泊を請う。  
これは何という宿なのか、  
宿の主人は誰なのか、  
女中はどこにいるのか、  
見よ、何と風変わりな部屋なのか！  
暖炉に赤々と燃える火もなく、  
大カップに溢れるお酒も出ない。  
魔術師よ！主人よ！  
下に居る者達は誰なのか。

(8) 死後に赴く所として、ディキンソンには天国について描写した詩が大変に多く、「天国」に当たる英語“Heaven”と“Paradise”を *Concordance* で引いてみると、それぞれ 142 回、57 回ほども使用されています。天国に関する

詩は枚挙に暇がない程で、いつか別稿にてディキンソンの「天国」のイメージとその「構造」について検討しなければなりません。ここでは、その中から代表的な詩の一つ、二つを見ておきます。一つは天国（或いは地獄）への距離を尋ねている詩、もう一つは天国へ行ってみたら、思いのほか快適だった等と、天国の事を若干ユーモラスに皮肉な調子で記した比較的有名な詩です。

例詩⑬。(How far is it to Heaven? / 929)

天国まではどれくらい遠いのでしょうか。  
こっちの方で、死ほどの遠さです。  
そこまで辿り着くまでに幾山河あるか  
分かりませんが。

地獄まではどれくらい遠いのでしょうか。  
こっちの方で、死ほどの遠さです。  
お墓の左手の先どのくらい遠いか  
地勢図を見ても見当が付きませんが。

例詩⑭。(I went to Heaven - / 374)

私は天国へ出掛けた。  
それは小さな町で、  
綿毛の囲いが周囲を廻っていて  
ルビーの明かりが一つ光っていた。

(中略)

住人達は蛾のような  
メクリン・レースの身体つきで  
務めは薄い紗のごとく軽く、  
名前は羽根蒲団のようだった。

(後略)

さらに、死後の問題として Calvinism の教義通り果たして無事に「永遠の魂」を得られるのかどうか、最後の審判の日に“elect”されて天国へ迎え入れ

られるかどうか、という事について、懸念、疑問、信念を現した詩群があって、これなども“death poems”のカテゴリーに入ると思われます。例えば、次のような詩です。

(9) 死後、復活する事を夢見ながら、現在は無邪気に眠っている(=死んでい  
る)臆病で純朴な人達の事を皮肉った詩。

例詩⑮。(Safe in their Alabaster Chambers - / 216)

雪花石膏の部屋の中で身を守られて、  
朝が来ても動かされず、  
昼が来ても動かされず、  
おずおずとして復活を待ちもうける者たちが横たわる。  
繻子の椀に石の屋根。

歳月は、月の満ち欠けの如く通り過ぎる。  
世界は円弧を掬い取り  
天空は漕ぎ行く  
王権は崩壊し、総督も降伏する<sup>(4)</sup>  
雪片の上のしみの如く、音もなく。

(10) 信仰の功德によって、死後、天国で晴れてキリストと結婚するのだとい  
う喜悅と確信を、女らしくドラマチックに描いた詩群。こうした形の「結婚の  
詩群」はディキンソンに数多くまた特徴的ですが、これらは現実の特定の男性  
を対象にして歌った恋愛詩というよりは、むしろ宗教詩に近く、死後の世界の  
こと(天国での結婚)を描くという意味では“death poems”のカテゴリーに入  
れられるでしょう。

⑯。(Mine-by the Right of the White Election! / 528)

白を選択したという権利によって私のもの!  
王の御名御璽によって私のもの!  
(中略)

墓を廃止した事によって私のもの。  
称号を与えられ、確定されたもの。  
歓喜の憲章。

年月というものがある限り私のもの。

⑰。(Title divien—is mine! / 1072)

聖なる称号は今、私のもの！  
儀式なくして妻！  
貴い資格が私に与えられて  
私はカルヴァリーの女王！  
ただ王冠がないだけで、あとはすべて王公然！

⑱。(Given in Marriage unto Thee! / 817)

ああ、天にまします神様、  
結婚によりあなたに召されたものです。  
父の子の妻にして、  
精霊の妻でございます。  
他の婚約は解消しました。  
個人の意志による結婚は廃るもの。  
ただ、この指輪を持つ者だけが、  
死に打ち克つのです。

(11) 死後の自分の魂の救済の事に関して、正当的なピューリタン信仰の重要性を記した詩群がありますが、これなども広義の“death poems”に含められるでしょう。

例詩⑲。(To lose one's faith—surpass / 377)

信仰を失う事は  
地所を失う事よりゆゆしい事。  
なぜなら地所は買い戻せるが、  
信仰は買い戻せないから。

生命とともに受け継がれて  
信じる事は一度だけ。  
一項目でも破ったとなると  
存在は乞食となる。

例詩⑳。(I never saw a Moor— / 1052)

私は荒野を見た事がない。

私は海を見た事がない。

でも、私はヒースの荒野がどんな風に見えるのか、  
海の波がどんなであるかを知っている。

私は神様と話した事がない。

天国を訪問した事がない。

でも、私は天国の場所を知っている。

あたかも小切手もらったかの様に、しっかりと。

こうした「神の国」へ入るといふ事についての懸念、信念、あるいは信じる事の重要性を歌った詩に対して、そもそも「あの世なるもの」があるのだろうか、という疑問を表わした詩があります。これなどは正統的キリスト者の態度からみると、許されがたい不信心者のそれと言えるのではないかと思われませんが、そうした種類の詩も若干見られます。

(12) 例えば、前掲の例詩①では死に行く人を観察している者は、その時、そこに神の恩寵の徴を発見できておりませんし、同じく前掲の例詩⑨では、自分が死ぬまさにその瞬間に、何と！（多分死臭を臭ぎ付けて）青蠅が音を蹴立てて飛んで来るのです。

例詩①。(I've seen a Dying Eye / 547)

例詩⑨。(I heard a Fly buzz-when I died-/ 465) を参照。

(13) また、死後の世界の正体を（即ち魂が救済されるかどうかを）、垣間見ようと懸命に努力するが、それは至難の技だ、とする詩があります。

例詩⑩。(This World is not Conclusion / 501)

この世で終わりというわけではない。  
もう一つ別の世界が向こう側にある。  
それは音楽のように不可視ながら、  
しかも、音のように明確な世界。  
それは私達を招き寄せ、かつ戸惑わせる。  
哲学も窺う事ができず、  
人の知恵もついにその謎の世界を  
くぐり抜けて行かなければならない。

以上が“death poems”における種々様々な死の描かれ方です。

さらにディキンソン詩には、この世界の足もとにぼっかりと口を開いている深淵の存在を意識する事から、この世界そのものの危うさ、脆さへと想念を広げて行く一群の詩がありますが、それらに見られる考え方は近代の実存主義の考え方と軌を一にしていると言えます。そのイメージは百年以上も前のものとは思えないほど鮮やかでモダンなものです。

例詩②。(I never hear that one is dead / 1323)

私は誰かが死んだと聞くと  
いつも人生の偶然性の思いで  
改めて自分の足元がすくわれそうに感じる。  
あの最も恐ろしい信念、

深淵の上で平穏無事に耕作している普通の人々にとっては、  
あまりにも恐ろしい信念なので、  
彼らが万一そのパツクリと口を開いた深淵の事を  
ちらとでも意識したらきっと心は狂ってしまうであろう。

(以下、略)

しかし今は、話をあまり拵げずに、ひとまずディキンソン詩では死をめぐる詩群が質量ともに顕著であって、それらが彼女の詩群のほぼ中心部を形成しているようだ、<sup>(5)</sup>という事を確認しておくに留めましょう。

【お墓の詩】 こうした死に関する詩群は、確かにそれだけでも風変わりですが、ディキンソン詩においてさらにユニークな点は、お墓に関する詩が多いという事です。Allen Tate がディキンソンは「抽象概念を知覚し、感覚的なものを思考する」(“she perceives abstraction and thinks sensation” 斜字は Tate)<sup>(6)</sup>と道破した事は有名ですが（抽象概念を具体的なイメージで知覚する点 “Metaphysical Poets” の一人 George Herbert に類似しているとよく言われます）、それが端的に表わされているのが、ディキンソンのお墓をめぐる詩群でしょう。即ち、D 詩には墓地、墓碑銘、墓参り、葬儀・葬列あるいは馬車での墓地への遠出などのほ

か、何と死後のお墓の中での生活とか、お墓の中での死者たちの会話などが具象的なイメージで描かれています。こうしてディキンソンが死に取り憑かれていたという場合、具体的には「お墓」に取り付かれていたといった方が適切な場合が多々見られます。例えば、Faulknerの自殺決行者 Quentin Compsonは死ぬ日の一日中、死と時間の想念に付き纏われるわけですが、同様に次のD詩の人物（“I”）には「お墓」が強迫観念として、いわば伴侶のように、四六時中取り付いているのです。

例詩⑳ (Bereaved of all, I went abroad— / 784)

(前のスタンザ略)

私より先にお墓が宿を取ると、  
私がベッドを求めようとしたとき  
私用の枕にお墓が、  
頭を休めていた。

私が目を覚ますと、お墓は先に目を覚ましており、  
私が起き上がると、お墓は私の後を追ひ、  
私は人だかりの中で、お墓を振り切ろうとて、  
海の中に巻こうとした。

わざわざお酒の勢いを借りて、まどろんで  
お墓を溺れさせて忘れさろうとしてみた。  
確かに、お墓は消えた。  
しかし鋤の形が記憶の中に尾を引いた。

[死意識を生み出した要因] それでは、なぜディキンソンはそんなに死に対して強迫観念を持つようになったのか、という問に答えるために、今、彼女が置かれていた、時代的・地理的・社会的環境を考えてみましょう。<sup>(7)</sup>

#### (1) Puritanism より来る死の意識

まず死の意識を強烈なものにするものとして Puritanism の死観と言うものがあると思われます。 Puritanism には当然キリスト教としての一般的な教義

もありますが、Puritan 独特の教義があって、その中核には Calvinism の考え方があつた。それを煮詰めて言うと、それは人間の「原罪」（“Original Sin”）をさらに厳しく暗く捉えた、人間の「墮罪」（“Natural Depravity”）という観念と、人間の運命の「予定説」（“Predestination”）および最後の審判に臨んでの「選び」（“Election” または “Damnation”）の観念だと思われまゝ。<sup>(8)</sup>

Calvinism の教義によりますと、人間が最後の審判に臨んで選別されて救われるかまたは呪われるかは、「あらかじめ決定されていて」（“Predestined”）、そのいずれであるかは、死の瞬間に<sup>しるし</sup>徴として見られうるといふ事で、Puritan の人々の死の瞬間に対する関心はことさらに強かつたものと思われまゝ。ディキンソンは人が死ぬ瞬間に強い関心を寄せたといふ事を、先程申しましたが、その一つの現われとして、彼女はかつて親しかつた人が亡くなつた後では、必ずその人の身内に手紙を書き送り、その人の最後の瞬間の事について根掘り葉掘り聞き質したといふ事が有ります。これも一つには Puritan 的関心の現われからと見做されまゝ。

ディキンソンはまた 18～19 歳の時、Mount Holyoke Female Seminary（宗教教育を中核としたいわば牧師の妻を目指させるような高等女子教育機関）に在学してゐたとき、女監の Miss Mary Lyon の指導に従はず、遂にクリスチャンになる事に肯じなかつたといふ事件を引き起こしてゐまゝし<sup>(9)</sup>（1848 年）、また父母兄弟が信仰告白して正式の教会員となつた時も（父、妹 1850 年、兄 1856 年）それに同調せず、一生正式の教会員にならなかつたといふ事もあり、また教会の礼拝儀式、説教等についても懐疑的なところがありました。逆に言うと、そうした教会や牧師達言うところの「予定説」「選別」といつた Puritanism の窮屈な観念を、我と我が眼で実証的に死の瞬間において見届けてやらざるべからずといふ意識もあつて、先程の若干の死に関する一種冒瀆的な詩群は生み出されたものでありまゝしう。

では、ディキンソンがそうした宗教的儀式・制度に反発したから、彼女は即、非宗教的だつたかといふと、そういう考えは早計であつて、むしろ真実のところは、彼女は彼女なりに Puritanism の伝統を真剣に受け止め、心から素直に



納得できずに、迷っていたという事だと思われれます。彼女はある意味で Puritan 以上の Puritan であったといえますし、その一方、形式化・形骸化した教義・儀式に対して疑念を持っていたという点、時代的に考えてみますと Unitarianism 的な、もしくはむしろ Transcendentalism 的な感受性と信念とを持っていたという事が出来ましょう。<sup>(10)</sup>つまり、ディキンソンはいわば Jonathan Edwards の伝統を引く New England 内陸部の Connecticut Valley 地方（生まれ故郷のアマーストはこの渓谷沿いの小集落です）の、厳格で反動的な Puritanism の伝統と、ボストン、コンコルドを中心とする自由主義的で知的な Unitarian 的なそして Transcendental な思潮との間で、揺さ振られていた事を示しているといえましょう。さらには 20 世紀のとば口を前にして、現代人的な死と生への科学的な認識方法の到来が、死の瞬間の意味合いに対して彼女をことさら敏感に対峙させたと言う事もできましょう。

## (2) 遍在する死、南北戦争の死者

当時は 17、8 世紀の頃に較べると、事情は幾分好転していましたが、夭折したり病死したりする者が多く、死というものがいわば遍在していたという事情が有ります。平均寿命も約 40 歳と短く、<sup>(11)</sup>栄養不良、産辱死、死産、乳幼児の死亡率が高かった事。そういう事から、エミリも実際に身近で死者に接する機会が多かった。<sup>(12)</sup>

また小さな町の事とて、人の死はすぐに町中に伝わったという事。(Cf. “It’s easy as a Sign- / The Intuition of the News- / In just a Country Town-” / 389) また、一方、エミリの詩作の最盛期と重なる社会的事件に南北戦争があり (1861 ~ 65)、その戦死者の報知もアマーストの町に続々と届いた事。特に、1862 年 3 月のアマースト大学の学長 William Sterns の息子、Frazar Sterns の戦死で、町中が悲しみに包まれた事等々、<sup>(13)</sup>いわば死が身近に遍在していた事。こうした事も、エミリを死の想念へと向かわせるのに大いに与ったのに違いありません。<sup>(14)</sup>

## (3) New England の風土より生まれた死の意識

ついでニュー・イングランドの内陸地アマーストの地勢学的な存在様式が死

の想念へと向かわせたであろうという事について考えてみましょう。和辻哲郎の『風土・人間的考察』（1935年）流に、気候や土地の人間性に与える影響と云うものを考えたとき、まず北米大陸の人間の存在様式が一種特徴的なものであり、次にニュー・イングランド、さらにはアマーストのそれが独特なものであったという事。

例えば、北米大陸の様に、広大な平原はあれどもそこに歴史性を欠如している場合、即ち、過去の人間たちの身分の差による確執、権門の消長、人の世の栄枯盛衰、過去の文化活動、様々な人間的営為等々への歴史的な思い入れが阻まれている場合、人間はいわば広大な空間と、長大な時間軸との中で、文字通り巨大な宇宙と卑小な人間存在との対照に、孤独感に襲われ、何らかの形での宗教的な欲求に駆られるのではないでしょうか。<sup>(15)</sup>

さらに、ニュー・イングランドの自然は冬は厳寒と雪景色、春・夏・秋は光と緑と幽寂の美があり、四季折々に人を瞑想に誘いがちである事。そうした自然がコンコルド在住の Emerson, Thoreau 等の思想形成に大いに与ったとするならば、その近隣の地に同時代人として住んだディキンソンたちにも、必ずや同様の影響を与えたに違いありません。特にエマソンの『自然論』（*Nature*, 1836）や「詩人論」（“The Poet”, 1844）などのエッセイには、自然の人間への感化力、あるいは人間の自然への感応力が如実に描かれていますが、この場合の自然とは大西部のそれや、南部のそれや、はたまた抽象的な自然ではなく、彼らが日々接し、観察していたニュー・イングランドのそれであったはずですし、またソローの Walden 池畔での単独生活、自然観照、瞑想などといったものは、コンコルドの秀麗な自然と、くっきりとした四季の変化があってこそ可能となったものでありましょう。

さらには、ディキンソンの故郷アマーストは Massachusetts 州の西の内陸部にあり、そこはいわば山国であって（Cf. “Bred as we, among the mountains” / 76）、海浜に遠く、開放的精神を育む事が困難だった事。アマーストはただっ広い野原、牧場、沼沢地などが、遠方の丘陵地によって周辺を取り囲まれた盆地で、いわば陸の孤島のような小集落であり、そこに寄り添う様にして

住まう人々の頼りない存在形態と、天空を規則正しく単調に運行していく太陽の姿、特に毎日、空を染めながら丘陵地の山並みの向こう側に消えていく落日の姿には、詩人ならずとも、そこに住まう人々を瞑想的・宗教的な気持ちに誘うものがあつたと思われまふ。このコネティカット溪谷地方の自然環境の事については、同溪谷出身の宗教家 Jonathan Edwards の精神形成に与えた影響として、次のような観察がありますが、それは「神の威厳」を感得させ宗教心を培うものだつたとされています。

.....その溪谷とはどんな環境だつたのだろうか、河・沼地・自家の牧場をも含めた野原・丘・森からなるひろびろとしたその処女地には、エドワーズが小さい時から一人きりになつて祈つたり瞑想にふける場所があつた。そこで享受した自然の美は.....彼自身の回心の体験と表裏一体をなしてゐる.....とくに.....悠大な自然の上に拡がる空や雲を仰ぎみた時、示された「神の威厳と、恵の甘美な感覚」などは。<sup>(16)</sup>

こうした気候、地形、自然環境はアマーストのように都会地から遠く離れ、農業と畜産を主たる産業とする小さな地域で、<sup>(17)</sup>そこに住まう人々が伝統的に殆ど聖書のみを主たる愛読書としてゐる場合、謹厳実直な生活感覚と宗教的な感覚(死の意識を含めて)を培つたのではないのでしょうか。こうした事を今少し簡略化して言えば

① 例へば、広大な大自然に対して太陽が規則正しい単調な運行をする場合、エミリのように敬虔なタイプの人間が天界を渡る太陽(朝日、中点の太陽、沈む夕日)<sup>(18)</sup>を独りで長時間眺める事が多かつた場合、それは悠久の自然に対して、時と季節の推移、生きとし生ける者の mutability そしてまた死の意識へと想念を拡げさせたのではないかという事。

しかもアマーストは、ただっ広い盆地で、遙か遠方の丘陵地によって眼路を仕切られ、一方、上天はどこまでも開けていて、これは広大な“Garden”(庭)の中に、個が佇立し、天に直かに接するという赤裸々な形態を取つており、こうした存在形態は人間の孤独感をいや増させるとともに(教会などの制度

を通じることなく）、神との直接交流というものを促し（死の観念をも含めて）宗教的な想念へと向かわせがちであっただろうという事。

② アマーストは四季の区分がはっきりしているために、季節の変わり目に年々歳々花相いたり人同じからずの情を誘いやすく、自然のサイクルの悠久さに較べたとき、人間の Mutability の意識へと向かわせがちであっただろうという事。そしてそれは人間存在のはかなさ、および死と死後の魂の問題へと、瞑想を誘ったのではないかという事。こうした事を表すものとして、晩夏から初秋へかけての季節の微妙な衰亡の感覚をキリスト教の礼拝儀式を模して記した例詩があります。

例詩②④。(Further in summer than the Birds / 1068)

夏に鳥たちよりも遠く  
草の間より物悲しげに  
小さな一群が慎ましやかな  
ミサを取り行なう。

聖餐式もなく  
恩寵も大変に緩慢に与えられ  
ミサは物思わしげな慣習となって  
寂寥感を広げている。

真昼もこの上なく古めかしく感じられ  
夏が今まさに燃え尽きなるとするとき、  
この虚ろな詠唱が湧き起こり  
永眠を予表する。

まだ、恩寵は与えられず、  
輝きは褪せてもいないが、  
しかも、ドルーイ德的陰影が  
今や、自然を支えている。

(4) 墓地と修道院風の「ディキンソン屋敷」の醸し出す死と瞑想の雰囲気

① エミリー・ディキンソンが9歳から24歳まで住んだ North Pleasant 通

りの家は共同墓地 (West Cemetery) に隣接しており、墓地がいわば家の中庭みたいな存在であって、子供時代の遊び場でもあった事 (Cf.No.467)。またエミリが誕生の時から9歳までと、24歳以降に住んだ「ディキンソン屋敷」(“The Dickinson Homestead”)も牧草地を介して、同じ共同墓地と殆ど隣接しており、いわばエミリはお墓とともに育ったという特異な環境があったという事。この事が、ちょっと変な言い方で申し訳ないのですが、いわば「三つ子の魂百まで」式にエミリをお墓好きの人間にしたという事。

② ニュー・イングランドの中でも、さらに一段と宗教色の濃かったコネティカット渓谷地区では、日曜毎の墓参りは習慣化しており、そうした墓参りの人たち、それに葬式の列はディキンソン邸の前を必ず通りかかった事<sup>(19)</sup>。このようにお墓が家の裏手にあったという環境は、何かにつけエミリをお墓と死の想念へと向かわせたであろうという事。

③ 「ディキンソン屋敷」は庭が広く草木が繁茂し、周囲は高い樹木で取り囲まれており、外からの視界を遮り (Cf. No.657), 庭作りや散策に適していて、いわば私設の修道院といった感じであり、文字通り「隠遁」(むしろ宗教上の勤行としての「聖修」“retreat”)に適していたという事。この事がエミリを自然の美しさへの開眼と同時に、宗教的な瞑想それに死の想念へと向かわせたであろうという事。恐らくはこの広大な「ディキンソン屋敷」の存在なくしては、エミリの隠遁という生活形態も詩作活動もありえなかったはずです。事実、エミリの詩作への従事の時期について調べてみても、ジョンソン版のNo.1～5を除いて、最も早い制作 (No.6) の時期が1858年 (エミリ27歳時) になっており、その後のすべての詩がこの「屋敷」に移ってから後の作である事から、この「屋敷」「隠遁」「詩作(と文通の)生活」はある意味で、詩人ディキンソンの基本的な生活形態を生み出す三位一体をなしていると言う事ができて、その意味ではこの「ディキンソン屋敷」の存在は、強調しても、し過ぎる事はないであります。

④ 煉瓦造りのディキンソン邸の二階西南角のエミリの居室の窓からは、遙かな南方にHadleyの山並み、および西方にアマーストの町並みが見晴かせ

て、また上天が開けており（さらに三階には小さい丸屋根の見晴らし台もあった）、いわば眼下に人界を見晴かしながら、<sup>(20)</sup>天への想いを誘うような環境にあった事。天を渡る太陽、沈む夕日、それに人間世界の変転の様子に、エミリが人間存在の Mutability と死の想念に満たされても不思議ではなかったであります。

〔生の欲求の裏返しとしての死への関心〕 エミリは死に強い関心を寄せ、“death poems”をかように数多く作ったわけですが、彼女においてはむしろ生への欲求が強ければ強いほど、逆にますます死を関心の中心に引き寄せ、死と戯れ、死の歌を歌ったのではないか、と言う事について考えてみたいと思います。

エミリは、よく「隠遁者」という形容辞を被せて呼ばれる習慣になっていますが、「隠遁者」という語の通常の意味からは捉えられないような、強烈な生への欲求とエネルギーを持ち、知力、意志力、それにユーモアの感覚を持ち合わせた希有なる女性だった様に思われます。その事は例えば、エミリに直接面会した評論家のヒギンソンの報告によっても偲べれます。ヒギンソンは約8年の手紙のやり取りの後、1870年夏（エミリ39歳の夏）、遂にアマーストのディキンソン邸を訪問し、エミリに会って語りあった後、早速妻宛に次の様に書き送っています。「私はこんなにも私の神経をくたくたにさせる人にこれまで会ったことがない。彼女に触れないのに、彼女は私から力を吸い取ってしまう。こんな人の近くに住んでいなくて助かった」と。短時間の会見の間に、エミリは自らの生き方・人生観について、極めて凝縮された表現で語ったようであります。そこには彼女の内面生活の緊張度が髣髴として窺われます。

また、エミリの思想と行動様式の基本となるようなものを、彼女の言行録や書簡集から拾ってみても

(1) 「なぜ、（普通の人々は毎日のルーティンの中で）これという考えもなく生きていけるのでしょうか……朝、服を身に纏う力をどうして得られるのでしょうか」(L 474)<sup>(21)</sup> などと言っていて、無自覚的で平凡な人生への疑問もしくは反発がみられます。

(2) 19歳の頃、親友で文通相手だった Abiah Root への手紙に「岸辺は安全だけれど、私は荒波と戦うのが好き……危険が好き」と記していて (L 104)、冒険心旺盛なところを見せています。

(3) 「こうして生きている事自体に、喜びを感じます。」(L 474) と生命そのものへの賛歌を公言しています。詩の中にも生命の貴重さと、それへの歓喜の念を現したものが多ようです。(To be alive—is Power— / 677)

(4) エミリは自然への愛が人一倍大きかった。例えば「朝日を見たのは、私と犬だけだった」と自然の美しさを一人で所有している事への誇らしさを記しています。またヒギンソンへの手紙の中でも「私の友達は——山々、日没、そして犬です」(L 261) と記す位、アマースト近辺の自然もしくは風景を愛し、自分を「美に取り囲まれたカンガルー」(L 412) と呼ぶほど、取り囲む自然の美に酔う事のできる人だった。こうした事は、広義に解するならば、死と時間に抗すればこそ生を貧り尽したいとする(いわば Virginia Woolf 的な) 欲求の一つの現われと見做す事ができるでしょう。

(5) Conrad Aiken が「エミリは入念な熟慮の上で自分から選んで隠遁したのだ<sup>(22)</sup>」と言っていますが、エミリの「隠遁」とは恐らく「思慮深く生き、人生の本質的な事実とだけ向かい合うために」<sup>(23)</sup>、森の中に入って行ったソローのそれと同種類のものであった事でしょう。ソローの宝石のように輝く冬の池とそこに住まう小動物の描写(“Winter Pond,” *Walden*)<sup>(24)</sup>等にみられる自然賛歌は、エミリのそれと全く同一のものと言って差しつかえないでしょう。という事は、エミリもソローがそうであったように、エマソン<sup>(25)</sup>の唱道した自然参入の哲学(*Nature* や “The Poet” 等に見られる)を意識的かつ積極的に実践に移していたのだ、と言ってもよいかも知れません。

(6) 隠遁者ながらもエミリが生と冒険への欲求が人一倍強かったという事は、彼女が George Eliot, Mrs. Browning, Emily Brontë といった、同時代の情熱的で反逆的な人生を送った、女流詩人・作家達の事を強く意識し、彼らに傾倒していた事によっても知られます。<sup>(25)</sup>

(7) 一方、エミリの肉体そのものについてですが、それはむしろ虚弱であっ

て、神経過敏ではなかったかという感じがいたしますので、その辺の事を少し検討してみましょう。

① まずエミリには1864～65年の33、4才の時の眼の疾病があり、彼女はケンブリッジにその兩年、ほぼ半年ずつ滞在し、ボストンの眼科医に恐らく鉄道馬車で通ったという記録がありますが、<sup>(26)</sup>正確な病名が何であったか、現在までのところ不明です。いずれにしても、失明の危機があつたともいわれるこの視力障害が、彼女の暗闇の世界（＝精神活動の死）への関心と恐怖を掻き立て、逆に彼女の詩作活動に大きな拍車を加えた事は否定出来ません。

② 世馴れていないせいか、立ち居振舞が子供のようにだったという事、および痩せていて「過度の神経過敏のようだった」（L476）事をヒギンソンが観察しています。

これはエミリ晩年の事ですが、同時代の女流作家で同じアマースト出身のHelen Huntがエミリに会って、その時の印象を（少し意地悪い調子で）書き残していますけれども、そこには「私は牛、あなたは蛾」（L565）といった端的な表現があります。

③ 死因のBright氏病についてですが、これが正確にいつごろから始ったのか不明ですが、恐らく晩年は慢性の腎臓病を病んでいて、病気がちだったのではなかったかと思われまゝ。このようにして、エミリは肉体的に虚弱であった事と、親類や身近な人達に実際に死ぬ人が多かった事などから、恐らく死の事を、単に哲学的な問題として、あるいは詩の題材にふさわしいからとかいう理由からだけで取り上げたのではなく、我が身の問題として受け止めていて、死に対して常々馴れ親しんでいたのではないか、と思われまゝ。

かくして、エミリの場合、肉体の虚弱性があればこそ、死を見つめる機会が増え、死を見つめればこそ、逆に生命の燃焼欲が掻き立てられ、それが自然な形で充足できなかつた故に、精神の異常な緊張が生じ、その緊張ゆえに、自然なる生活はますます遠のき不可能となり、いわば、圧力をかけられた生へのエネルギーは、専ら感動する事と詩作活動（と文通）へと向けられた。かくして、彼女の詩想は、死への求心力と生への遠心力とが緊張を孕んで釣り合うところ



から、羽ばたいたのだと言えましょう。つまりは、このようにして死と生との往復運動がエミリの精神の内界で起こっていた、と考える事が許されるのではないのでしょうか。このようにして、エミリの死の歌には生の倍音が響かされているのだ、と。

[永世への観念] 以上の様に D 詩には死の想念がおびただしいのですが、いまディキンソンを彼女が生きていた時代(19世紀中葉)のピューリタニズムの伝統の中に置くとすると、ピューリタニズムが、死後の運命の「予定」と「選別」と云う事を教義の大きな支柱としている以上、D 詩の全体像を捉えるためには「死後の魂の行方」に関する詩群を扱わなければ片手落ちとなるでしょう。死に関する詩群の多さの指摘だけでは、D 詩は単に morbid で grotesque なものになるだけであって、その全体像を眺める上で公平を欠く事になりましょう。実際に、D 詩には、死の向こう側の事を記した詩群もこれまた数多いのです。そしてそれらは、エミリの天国の存在に対する信念(もしくは疑念)や、死後自らが「選別」(“elect”)され救済されるのだという事への信念、そして天国で晴れてキリストと結婚するのだといった願望と信念を歌った詩などになって、定着されているようです。

ディキンソンの死生観を検討してみると、彼女にとって、生に対立するものは死ではなく永世であって、死とは永世への入口(ディキンソン流の言い方をすると、死は生と永世との間のハイフン)にしかすぎないとする考え方が成立しており、そうした事情を表わした詩は相当に沢山あります。それらをここで簡単に検討してみましょう。

これもあらまし、3、4つの型に分けられると思います。

(1) 彼岸への確信と信仰の大事さを記した詩、即ち、正統的 Puritanism に則った意識ないしは態度を表わした詩群。

例詩⑱。(To lose one's faith— surpass / 377 前掲の詩につき訳文は省略)

例詩㉕。(Death is a Dialogue between / 976)

死とは精霊と  
塵との対話。

「朽ちるならん」と死。精霊応えて、  
「私は信仰を持っている」  
死はその言を疑い、地中より反駁する。  
精霊は証拠品として、  
土のオーバーを脱ぎ捨てて、  
回れ右をする。

例詩⑳。(I never saw a Moor— / 1052 前掲の詩につき訳文は省略)

彼女の信仰は、教会等の形式的制度を通さないものでしたが、逆に、キリストへの思いというものは極めて真率なものだったという事については先ほど述べました。次はそうした事情を端的に表わした詩群の代表例です。これなど「ディキンソン屋敷」の宗教的雰囲気や遺憾なく表していますが、そこが一種の私設の修道院であったという、私の推定を裏付けるものだと思います。

例詩㉑。(Some keep the Sabbath going to Church— / 324)

ある人達は教会へ行って安息日を祝いますが、  
私は家に留まって祝います。  
ボボリンク鳥が聖歌隊で、  
果樹園が教会の丸天井。

ある人は白いガウンで安息日を祝いますが、  
私はただ翼をはやすだけ。  
教会の鐘を鳴らす代わりに、  
私達の小っちな寺男が歌います。

高名な牧師さんたる神様御自身が説教されますし、  
説教は簡潔そのもの。  
そういうわけで、やっと最後に天国へ入って行くかわりに、  
私はいつも天国に通っているというわけです。

例詩㉒。(He preached upon “Breath” till it argued him narrow— / 1207)

牧師さんは「寛容」について説教して行って、ついに不寛容になってしまわれた。  
「寛容さ」はあまり寛くて定義できないもの。  
「真実」について説教して行って、ついに嘘つきのレッテルを貼られてしまわれた。

「真実」は見せびらしはしないもの。

単純さが彼の偽の存在から逃げていった。

丁度、金が黄鉄鉱を避けるように、

何も御存じないイエス様は、その「有能な」人と会われるとき、

戸惑いを隠さなくてはならないことでしょう。

(2) 彼岸もしくは天国の存在についての疑念を表わす詩群。

例詩②。(This World is not Conclusion. / 501 一部前掲の詩、次はその全訳)

この世で終わりと云うわけではない。

もう一つ別の世界が向こう側にある。

それは音楽のように不可視だが、

しかも音のように明確な世界。

それは私達を招き寄せながら、しかも戸惑わせる。

哲学も窺うことができず、

人の知恵もついに謎の世界を

くぐり抜けて行かなければならないのだ。

それを推測しようとして、学者達は当惑し、

それを手に入れようとして、

人々は数世代にわたる侮蔑を得てしまった。

そして、十字架の刑を見せつけられると、

信仰は抜け落ち、笑い、皮肉なものとなってしまう。

誰かにみられると、顔を赤らめ、

証明の枝を摘み取り、

風見鶏に道を尋ねる。

祭壇からは大仰な身振りの説教、

力強いハレルヤの声は轟いても、

魂を噛み切ろうとする歯痛のことは

麻酔剤を以てしても、鎮静することはできないのだ。

(3) 一方、正統的なピーリタンの宗教意識を離れて、現代(20世紀)の実存主義的な考え方を示す詩群も若干あって、そこでは日常生活の足元に開く「深淵」の存在を意識し、現実世界の存在の脆さ、危うさを指摘しつつ、生のアブサーディティの感覚を表現しています。

例詩⑳。(I never hear that one is dead / 1323 一部前掲の詩, 次はその全訳)

私は誰かが死んだと聞くと  
いつも人生の偶然性の思いで、  
改めて、私の存在が奪われてしまいそうに感じる。  
あの最も恐ろしい信念、

深淵の上で平穩無事に土地を耕している普通の人々にとっては、  
あまりにも恐ろしい信念なので、  
もし、彼らとそのパッキリと口を開いた深淵のことを  
一、二度でも意識したら、きっと心は狂ってしまうであろう。

こうした信念には、鐘木のように布が巻かれているけれども、  
もし、その恐怖がその内実に  
ふさわしい音で告げられたら、  
私達は一撃の元に息絶えさせられてしまうであろう。

私は、寂しい場所で、  
あの恐ろしくも、いやさらに見知らぬ意識と  
わざわざ向き合うような  
そんな大胆な人を知らない。

この意識を裏返すと、前述したように、生きている事をむしろ驚異・奇跡として捉え、生きている事そのものへの喜びを表わし、生の貴重さを歌った詩群が生まれる事になるであります。

例詩㉑。(To be alive—is—Power— / 677)

生きていることは力で、  
そのことだけで実存在、  
他に何の機能がなくても、  
十分に万能。

生きていること、生き続けること!  
それは神様と同じくらい万能なこと。  
私達の創造主が何であろうと、  
そんなものは「有限」!

(4) しかし、このようないわば死と背中合わせになっている人間の実存の様式を意識する事で、ある意味では発狂しそうな、危うい感覚を内面に孕みながらも、詩人は実はそれに絶望せず、むしろ逞しく現実的に生き抜いてしまっているようなところも感じられて、そこに私は、ディキンソンの女としての案外な楽天性とタフネスが窺えるようにも観じるのですが、それは例えば次のような詩などに見られます。

例詩②⑨。(I read my sentence—steadily— / 412)

私は私への宣告文を読んだ、しっかりと。  
宣告文の極刑の条文のところで、  
私が読み間違っていない事を、  
我が眼で反復し、つぶさに読み直した。  
恥辱 [=死刑執行] の日付と方法とを。  
そしてまた「神よ慈悲をたまいたまえ」という  
敬虔なる書式文面も。  
それらの事は陪審員達が票決で決したのだが。  
私は我が魂が、末期の際に事新しく苦悩を味わわないように  
その極限情況に馴染ませようとした。  
だが、私の魂と死とはお互い知り合いの仲だったので、  
友達のように平穩に会い、  
会釈し、そして何の動揺もなくすれ違って行った。  
で、この件は一件落着。

つまり死といい、不条理といっても、それは真っ正面から見つめるものでなく、戯れる相手として遇するのがよいといった、実際的で現実的な態度がみられるのです。ここいらにディキンソン詩の、テーマが深刻ながら、何かしらユーモアや軽みの生じて来る由縁があると思われれます。(もう少し難しく考えれば、深刻で重々しいテーマも、本人がどこまでそう信じて言っているのか分からないといった、詩人の取っているポーズの問題が生じて来るわけですが、今回はその問題には立ち入らないでおきます。)

以上のようにして、エミリは、教会や制度というものを通さなかったけれども、自分なりに神を信じ、神を求め、ときには神を疑い、生きていることの感

動と尊さを折々の詩に歌った。そこには彼女なりの（Transcendentalism の洗礼を受けてはいるが）真摯な Puritan の子としての信仰や態度の有り様が現わされているのではないかと思われます。

かくして、ディキンソンは死を彼女の詩作品の中心に据えていたと言っても許されるでしょうが、彼女の場合、死とは現世と来世との両方を繋ぐものであり、かつまた死は現世と永世との両方向を見晴かせる、彼女の思想上の最も重要な戦略的拠点であったのでありましよう。さればこそ、移ろい行く自然の美への感動、時間への愛惜の意識、人生の諸々の問題などが、彼女においては、その地点に向かって収斂し、そして彼女にとっては、それらの諸問題をこの隘路において捕らえる事が最も自然で、得意とするところであったのでありましよう。このようにして、死以外の、D 詩の重要な主題である自然、人生、愛、時間、永世等は、死を結節点として、すべてはそこにおいて結び合わされるという構図が成立していたのではないのでしょうか。そして、その拠点（=死）への関心と意識とは、前述した諸々の外的内的諸要因によってもたらされたわけなのです。まさに死の意識こそ、文字通り彼女の詩作活動とともに生命そのものの源泉だったといえるでしょう。

さて、それでは死の意識があれば、それだけで優れた詩が書けるのかというと、そうは問屋が下ろさないで、そこにはエミリの置かれていた、ある意味で幸運なる時代的・地理的特殊性が大きく与っていたと思われます。（個人的な理由、そしてまたディキンソンの家が果たした役割については、先程触れました。）その事について最後に触れておきたいと思います。

(1) エミリに死の意識を促進せしめたのは、単に正統的 Puritanism の教義のためだけというのではなく、むしろ、そうした教義が揺るぎ出してそのまま素直に信じられなくなった事から、起こったのであって、そこには 19 世紀末頃よりアメリカに顕著になって来た自然主義的な、近代科学的な意識——死とは非合理的でアブサードなものであって、神や自然はそのことに関して indifferent であるといった考え方——が頭を擡げて来ていて、エミリも正統的（もしくは反動的）Puritan の信仰と近代的感受性との間で揺れ動いていたとい

う事。

(2) コネティカット渓谷という、ニュー・イングランド内陸部のピューリタニズムの牙城のようなアマーストの地に生まれ育ちながら、一方でボストンやコンコルドなどの、自由主義的なユニテリアニズムの牧師達や、それよりさらに進歩的で「過激な」<sup>(28)</sup>超越主義者達の思想の洗礼をモロに浴びた事。その両者(ボストンとアマースト)の間を、エミリは見物旅行や病気の治療のために何回か(そして州会議員の父エドワードはしょっちゅう)、実際に往復しておりますが、この二つの都市(都会と田舎町と云うべきか)の感覚のギャップの間で、これまた揺れ動いていた事。

(3) 田舎町ながら極めて高い教育環境を持つ特殊な町アマーストで、父は大学の理事や州・国会議員を務め、エミリは Liberal なユニテリアン派の牧師、文芸評論家、新聞・雑誌の編集者達、大学の教授達と実際に、また手紙のやり取りなどを通じて、親しく付き合っており、また全国的に有名な新聞 *Springfield Republican* や月刊誌 *Atlantic Monthly* の愛読者でもあり、他方、ボストンやニューヨークの出版界の事情もよくわきまえていた事。このようにして、エミリはアメリカ全土のみならずイギリス・ヨーロッパの文化・文芸の新たな胎動を感じており、むしろ感覚的には時代の前衛の意識があり、アマーストの田舎町の教会・学校等で教え諭される事と、自らの鋭敏な感受性との間の分裂意識に悩んでいたであろうという事。従って、このような時代的・地理的・文化的両極端の狭間に生まれ育ったところに、彼女の大きい振幅での、感情の揺れ動きがあり、それがエミリの死の意識にも鋭角的で微妙なニュアンスを加え、それが D 詩全体に独特の形式と内容とを与えたのだと考えられます。

こうしてエミリは head と heart の分裂に悩みながら、死を中心に据えて現代人の心にも訴え掛ける独特の詩を書き続けて、孤独で、苦悩せる、恍惚の、そして静かで激しい人生を送って 1886 年 5 月、基本的には Puritan として神に召されたのでした。彼女の墓碑銘には、後年、姪の Martha Bianch (実兄 Austin と Susan の娘) によって “Called Back / May 15, 1886” という銘が刻まれました。この場合マーサの意図はどうかであれ、“Called Back” とは(エミ

りさんには申し分けない「綽名」ですが）「お墓っ子」ディキンソンにとって「お墓」が故郷、ホームだったのなら、ついに故郷に呼び戻されたと解してもよいでしょうし、あるいは周囲の価値観に同ぜず、形式化した教会や制度というものを重んじず、悩み反逆しながら、自分なりに神を模索して、ヨリ誠実に、ヨリ豊かに生きようとした一人の Puritan 女流詩人の念願が、最後に遂にかなった事へのねぎらいの言葉として受け取られるべき碑文でありましょう。

私はこのようにして、苦勞をしながら、また挫ける事なく、孤独に、そして明るく、秘かに詩作に動しんでいた、希有なる詩人のエミリー・ディキンソンに、日頃から敬愛するウィリアム・フォークナーにならって、homage を捧げる事でこの発表を締め括りたいと思います。その言葉は皆様、既に御賢察の通り“A Rose for Emily”であります。しかし、それは“not for Emily Grierson, but for Emily Dickinson”であります。そしてそれは pity ではなく、あくまで homage としてであります。…… “A Rose for Emily Dickinson.”

長時間の御清聴、どうも有難うございました。



本稿は去る 10 月 28 日（1989 年）、久留米大学において第 42 回日本英文学会九州支部大会の研究発表として口頭発表したものに、一部加筆したものである。ディキンソン詩の解釈の面で貴重な御見解を示された九州大学外人教師の Dr. John O. Reed (B. A., Oxford; Ph. D., U of New Castle) にこの場を借りて謝意を表します。



註

- 1 因みに最長の詩は No. 640 の 50 行。但し、聖バレンタインの日のための即興的詩 (No. 1 と No. 3) を除く。詩の番号は Thomas Johnson, *The Poems of Emily Dickinson* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard U. Press, 1979) に依る。
- 2 「今、『シリマン氏の化学』と『カトラー氏の生理学』を勉強していますが、両方とも大変面白いです。この学期の終わりまでに生理学は終って、春学期の期末試験です」 Thomas Johnson (ed.), *The Letters of Emily Dickinson* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard U. Press, 1986), p. 59. (以下、本書簡集よりの引用は L の次にページナンバーを付して記す。例えば、L 59 の様に。)
- 3 こうした専門的語彙の例として D 詩には次のようなものが見られる。“Microscope, Geography, Geometry, Chemistry, Topography, Philology, Comparative Anatomy, Philosophy, Observation, etc.”
- 4 これはディキンソンが文芸批評家 Thomas Wentworth Higginson へ初めて手紙を書いて送ったときに (1862 年 4 月 15 日)、同封した 4 編の詩の中の 1 編でもある。死後の復活の事を無心に信奉している、無垢なる人たちへの揶揄が感じられる。
- 5 「エミリの詩や手紙は死の衝撃や死の神秘で満たされていて時には強迫観念になっている」 Richard Sewall, *The Life of Emily Dickinson* (Farrar, Straus and Giroux: New York, 1980), p. 123. 「多くの批評家が死をエミリー・ディキンソンの中心的また病的な関心事だったと結論づけているがそれも尤もな事である」 David Porter, *The Art of Emily Dickinson's Early Poetry* (Cambridge, Mass.: Harvard U. Press, 1966), p. 27.
- 6 Allen Tate, “New England Culture and Emily Dickinson” in *The Recognition of Emily Dickinson*, ed. by Caesar Blake and Carlton Wells (Ann Arbor: The U. of Michigan Press, 1968), p. 158.
- 7 勿論、例えば Higgins が言うように「当時の小説や宗教的著作には丁度現代が『性』についてそうであるように『死』について書かれたものが多く……『死』は文学上のありふれた題材になっていた」という事情があるかも知れない。しかし、それは現象であり、結果であろう。私はその原因や社会意識の方面を探ってみたいのである。Cf. David Higgins. *Portrait of Emily Dickinson: The Poet and Her Prose* (New Brunswick, N. J.: Rutgers U. Press, 1967), p. 55.
- 8 Cf. Joan Phelan, *Puritan Tradition and Emily Dickinson's Poetic Practice* (Bryn Mawr College: Ph. D. Dissertation, 1972), p. 16 & p. 21.

- 9 Cf. L 60 & L 67.
- 10 「説教壇が形式主義者に奪い取られますと、礼拝者はいつも欺かれたように感じて、満たされぬ思いを抱きます。」Ralph Waldo Emerson, “An Address ” in *The Selected Writings of Ralph Waldo Emerson* ed. Brooks Atkinson (New York : The Modern Library, 1987), p. 76.
- 11 Carl Bode (ed.) , *Midcentury America : Life in the 1850s*, (Southern Illinois U. Press. 1972), p. xiii. 但し本書は未見につき孫引きである。Cf. 浅野赫「“I’ve Seen a Dying Eye” ——EDの「不滅」の一端を垣間みる——」『日本エミリィ・ディキンソン協会ニューズレター』No. 7 (1986) p. 8.
- 12 1844年, 13歳のとき, 早くも友達の Sophia Holland の死に接して衝撃を受けている。その他, 身近な人の死の例としては, アマースト・アカデミーのエミリの若い先生だった Leonard Humphrey の死 (1850年), 父 Edward の法律事務所で修習生として働いていた Ben Newton の結核での早逝 (1853年), 親友の Samuel Bowles の長患い, その妻 Mary の度重なる死産・流産, 叔母 Lavinia Norcross の死 (1860年), 叔父 Loring Norcross の死 (1863年), 兄 Austin の子 Gilbert の8歳での夭折 (1883年) 等々数多い。
- 13 「オースティンはフレーザーの死で心が凍えています。頭の中で『フレーザーが殺された』という, 父の告げた言葉がそのままに繰り返し聞こえると言うのです」(L 39)
- 14 その数は少ないながら, 南北戦争の戦死者を悼みその功を讃える詩あり。しかし概して戦争に関するエミリの詩は観念的, 因習的で, 独創性にとぼしい様である。Cf. Nos. 409, 426, 444.
- 15 「『無限に拡がる空間』が人に与えるのは恐怖と孤独感であり……人々は外界に対して自分の方から働きかけなければならなくなるだろう。自分と外界との非連続を連続に変え, そこに安らぎを見出すために自分から行動しなければならない。例えば超絶主義の根本的な心理的基盤はここにあった。エマソンが口をきわめて自我と宇宙の大霊の合致を説き……」金関寿夫『アメリカ現代詩ノート』研究社 (1977) p. 203. また Stephen Grane は Nebraska の吹雪の吹きすさぶ小さな町の事を次のように記している。「ここでは, 暴風のラッパが鳴り響くばかりで, 人の住む土地を創造する事は困難であった。そんなとき, 人間の存在は奇跡と見なされ, そして, 風に巻かれ, 火に焼かれ, 氷に閉ざされ, 病に襲われ, 宇宙をさまようこの球体に, しがつくより仕方ない寄生虫たちは, 輝かしい感嘆の言葉を受けるに値した。」スティーヴン・クレイン「青いホテル」『赤い武功章』西田実訳 岩波文庫 (1978) p. 310.
- 16 児玉佳世子「ジョナサン・エドワーズと大いなるめざめ」『ピューリタニズムとアメリカ』南雲堂 1969年 pp. 134～5.

- 17 アマーストが基本的に農業社会であった事の例。1850年10月アマーストでの初めての畜産会が開催され、ディキンソン家の人達はそれに参加した。1856年、エミリが作ったらい麦パンが2等賞になった。1857年の畜産会においてエミリは審査員の一人となった。Cf. Richard Sewall, *The Life of Emily Dickinson* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980).
- 18 “Noon,” “Sunset,” “Sunrise” に関する描写は枚挙に暇がない。それに注目した論文としては、Cynthia Wolff, “Emily Dickinson and ‘Noon’ ” 『日本エミリー・ディキンソン協会ニューズレター』 No. 10 (1989), pp 1 ~ 29. 武田雅子「エミリー・ディキンソンと『日没』」『尾形敏彦・森本桂樹両教授退官記念論文集』山口書店 (1988) pp. 453 ~ 466.
- 19 「ニュー・イングランドの他の地域同様、日曜日の午後にはお墓参りをする事が、アマーストの慣習であった」 Austin Warren, “Emily Dickinson,” *Connections* (1970), p. 81.
- 20 エミリが自分の窓の外に展開された事件を記した手紙、詩編は多い。サーカスの一行の通過、夜中、口笛を吹いて家路を辿る人、町の大火、窓の外の夕日、雪景色、窓打つ嵐、窓外の木立を切り裂く稲妻、等々。
- 21 Thomas Johnson (ed.), *The Letters of Emily Dickinson* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard U. Press), p. 474.
- 22 Conrad Aiken, *The Recognition of Emily Dickinson* ed. by Caesar Blake & Carlton Wells (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1968), p. 111.
- 23 Henry David Thoreau, *Walden* (New York: Norton, 1966), p. 61.
- 24 Ibid., pp. 187 ~ 197.
- 25 エミリは居室に George Eliot, Emily Brontë の肖像図を懸けていた。また、ヒギンソンに対して、George Eliot の強さを力説している (L 491)。Mrs. Browning の *Aurora Leigh* のエミリへの影響については、村形明子「エミリー・ディキンソン」『アメリカ文学の自己発見』山口書店 (1981) pp. 359 ~ 406 に詳しい。
- 26 エミリが Cambridgeport に滞在していた下宿の場所、その付近の雰囲気、ボストンの眼科医への往復の事については鶴野ひろ子氏の調査がある。Hiroko Uno, “Dickinson’s Letters from Cambridge: 36 Austin St.” 『日本エミリー・ディキンソン協会ニューズレター』 No. 9 (1988), pp. 1 ~ 10.
- 因みに、エミリは「隠遁者」としてディキンソン屋敷を離れる事が殆どなかったように記述された論文が多いようだが、実際に調べてみると、若い頃は州都ボストンを含めかなり、旅行している。その例。1844年 (13歳時)、ボストンの Lavinia 叔母を訪問。同年6月、Worcester の William 叔父を訪問。1946年 (15歳)、ボストンへ約1ヵ月滞在。1947年9月~48年8月 (16~17歳)、Mount Holyoke Seminary への就学で家を離れる。1851年9月 (20歳)、ボストン滞在。

死の意識とディキンソンの“Death Poems”（原口）

1855年2月（24歳）Washington滞在。同3月Philadelphia滞在。1860年（29歳）Middletown訪問。1864～65年（33～34歳）眼の治療で2度にわたりボストンに延べ1年程も滞在。

特に、33、4歳の時のケンブリッジへの滞在は、ある意味ではエミリのボストンへの遊学と考える事が出来よう。この時、彼女はボストンの自由な雰囲気とアマーストの窮屈で宗教的雰囲気、また喧騒と猥雑な都会ボストンと陽光と自然に恵まれたアマーストのディキンソン屋敷とその近辺での生活の事を対比的に捉えている。Cf. L 430, 431, 435.

- (27) Cf. (Tell all the truth but tell it slant— / 1129), (“Should the glee—  
glaze— / In Death’s—stiff stare—” / 338)
- (28) Transcendental Club の設立（1836年）、Brook Farm の設立（1841年）、Thoreau の Walden の実験（1845～7）、エミリが Newton からエマソンの詩集をもらう（1850年）。なお Transcendentalism の思想の唱道者エマソンは講演旅行でアマーストの町を6、7回も訪れていて、ある時などは、兄の Austin の家に泊まってさえいる（1857年）。このようにして、エミリは Transcendentalism の思想的影響を生涯に涉って、モロに受けていると考えられる。因みに、エマソンはエミリの父 Edward と同年の、1803年の生まれである。

## Index of First Lines of Poems Translated & Discussed

First Line	Poem Number	Page
After a hundred years	1147	29
Bereaved of all, I went abroad—	784	38
Death is a Dialogue between	976	48
Further in summer than the Birds	1068	43
Given in Marriage unto Thee	817	35
He preached upon "Breath" till it argued him narrow—	1207	49
How far is it to Heaven?	929	33
I died for Beauty—but was scarce	449	32
I Felt a Funeral, in my Brain	280	28
I heard a Fly buzz—when I died—	465	31
I went to Heaven—	374	33
I never hear that one is dead	1323	51
I never saw a Moor—	1052	35
I read my sentence—steadily	412	52
If I shouldn't be alive	182	29
If I should die,	54	30
I've seen a Dying Eye	547	26
Mine—by the Right of the White Election!	528	34
Safe in their Alabaster Chamber	215	34
Some keep the Sabbath going to Church	324	49
Title divine—is mine!	1072	35
To be alive—is—Power—	677	51
To lose one's faith—surpass	377	35
The grave my little cottage is	1743	31
The Last Night that She Lived	1100	26
There's been a Death in the Opposite House	389	27
This World is not Conclusion	501	50
We do not play on Graves—	467	28
What Inn is this	115	32